

## コーヒー摂取と口腔、咽頭、食道がん発症リスクの関連について： 宮城県コホート

Coffee Consumption and the Risk of Oral, Pharyngeal, and Esophageal Cancers in Japan: The Miyagi Cohort Study.

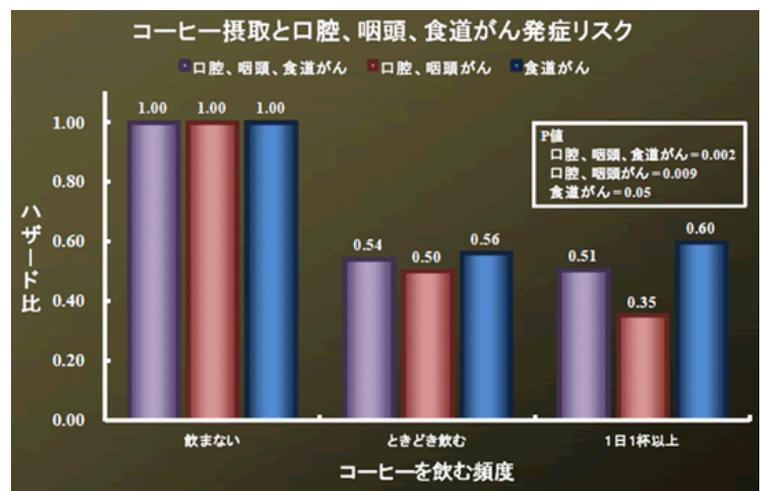
2008年 American Journal of Epidemiology 発表

### コーヒーを飲む量が多いほど口腔、咽頭、食道がんの発症リスクが低い

これまでの研究から、コーヒーが口腔がんや食道がんの発症リスクを低くする可能性があるのではないかと議論されてきました。しかし、この関連を調査した研究はその多くが症例対照研究であり、前向きコホート研究ではこれまでほとんど調査されていませんでした。そこで私たちは宮城県内の調査集団（コホート）のデータを解析して、コーヒーを飲む量と口腔、咽頭、食道がん発症リスクとの関連を調査してみました。

この研究では、コーヒーを飲む量によって対象者を3つの群に分けて、口腔、咽頭、食道がんの発症リスクを比較しました。その結果、コーヒーを飲まない群と比べて、コーヒーを飲む群の口腔、咽頭、食道がんの発症リスクは5割程度低いことがわかりました。コーヒーを「飲まない」と答えた人の口腔、咽頭、食道を全て合わせたがんを発症するリスクを1とすると、「ときどき飲む」と答えた人のハザード比（相対リスク）は0.54、「1日1杯以上飲む」と答えた人では0.51でした。また、口腔と咽頭がん、食道がんに分けた解析でも同様の傾向がみられました（図）。

飲酒、喫煙は口腔、咽頭、食道がんの強い危険因子だと考えられていますが、お酒を飲む人、たばこを吸う人の間でもコーヒーを飲む人ほど口腔、咽頭、食道がんの発症リスクが低くなることが示されました。



### 研究データについて

ベースライン調査：解析には「宮城県コホート」と呼ばれている、宮城県内の調査集団のデータが使われました。このデータは1990年6月から8月にかけて、宮城県内の14町村在住の40-64歳の男女5万1921人に対して生活習慣や健康状態などに関する自己記入式アンケートを配布し、うち4万7605人から有効回答を得たものです。有効回答率は91.7%でした。追跡調査：ベースライン調査に答えていただいた方を対象に、その調査時から2001年12月31日まで約13年の追跡調査を実施しました。その上で、調査開始以前にがんに罹ったことのある1146人と、今回の研究に関連する質問への回答に不備のあった7780人を解析の対象から外しました。その結果、3万8679人（男性1万8858人、女性1万9821人）が調査対象となり、うち追跡期間中に157人（男性135人、女性22人）が口腔、咽頭、食道がんのいずれかと診断されました。

### コーヒーの摂取について

アンケートでは、コーヒーを飲む頻度をはじめとして、飲酒、喫煙、食事などの生活習慣、これまでに罹ったことのある病気などを尋ねています。コーヒーを飲む頻度に関する回答は「飲まない」「ときどき飲む」「1日に1-2杯」「1日に3-4杯」「1日に5杯以上」の5つから選んでもらいました。コーヒーの種類や入れ方などは尋ねていません。

### 他のリスク要因の影響について

この研究では、コーヒー以外の大腸がん発症に関連すると考えられる要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、年齢、性別、BMI、喫煙、飲酒、野菜・果物の摂取、緑茶の摂取といった要因について、グループ間に偏りがないように、統計学的な処理を行いました。

---

### 研究の特徴と限界について

この研究で、コーヒーを飲むと口腔、咽頭、食道がんを発症するリスクが低くなることが示されました。この関連は、飲酒者や喫煙者といったこれらのがんの発症リスクの高い人達の間でも認められました。この結果は、一般住民を対象とした大規模な調査で、比較的長い追跡期間に渡って様々な要因の影響を考慮し解析して得られたものであり、これまで同様の調査を行ってきた多くの症例対照研究と比べて信頼度が高いと考えています。

ただし、この研究ではコーヒーを飲む頻度について追跡前に1度しか調査していないので、追跡期間中のコーヒーを飲む頻度の変化を考慮できていません。また、飲んでいるコーヒーの種類や入れ方、さらにはこれらのがんの発症リスクと関連があると示唆されているコーヒーの温度（熱い飲み物を飲む人ほど口腔、咽頭、食道がんの発症リスクが高くなると考えられています）についても調査できていないという限界もあります。

---